

## 『ボラれたが、いいか!』

まさか到着して一時間もたたないうちにボラれるとは思わないじゃないか。空港を出てホテルの名前を告げると、笑顔の青年が「約7ドルだよ」と、とても自然に、感じよく言うものだから、そのまま乗ったわけだが、あとで聞くと相場は3ドルだという。とはいえ7ドルでも、日本よりはずいぶん安い。

それでも夜の街を車で走るのはいい。しばらく行くと光り輝く巨大なドラゴンが見えてきた。ドラゴンの形をした橋だ。いったい誰が橋をドラゴンの形にしようと思いつくんだろう。車で通りすぎる間も、巨大なドラゴンは赤や青や黄色にどんどん色を変えていく。ここが日本でなく、中華文化圏であることをはっきり認識する。

こちらの人の現地なまりの英語は、私にはかなり聞き取りにくい。慣れが必要だ。飛行機の中でも客室乗務員のいうことばがなかなか聞き取れない。ややあって、「サーモンか牛肉か?」と聞かれていることが分かったので、かなりはっきりと「サーモンをください」と答えた。すると目の前に置かれたのは牛丼だった。この種のチャレンジは久しぶりだ。

この国ではそもそもほとんどの人が英語を話さない。じゃあフランス語はどうかというと、それも話す人は少ない。フランス語話者は多く見積もっても人口の1割に満たないという。ほんの数十年前まで、もっとも重要な言語のひとつだったことが嘘のようだ。

ホテルはフランス資本の立派なものだが、食事は高いばかりで面白くもないので、翌日の昼は外に出て現地のレストランを探す。木々の勢いが強く、舗装された歩道をぶち破って、街路樹の根があちこちで外に出てきている。土地が肥沃で食べ物が豊富に取れる国なのだ。現地の人が入っている麺のレストランを見つけて入る。私はこの言語はあまり読めないが、麺の名前は有名なので、文字を見れば分かる。日本でも見ることができるが、ここのはやっぱり種類が多い。適当に料理を選んで待つ。テーブルには唐辛子を酢につけこんだ調味料などが置いてある。

麺がでてきた。温かいスープに新鮮な生ハーブを入れて食べる。このハーブは日本では嫌いな人も多いが、私は大好きだ。スープを少し飲む。びっくりするほど旨い。インスタントとは違って、肉の出汁がきいている。野菜がとても生き生きしていて、勢いが違う。唐辛子を入れてみる。辛すぎず、味わいがある。最高だ。しかも安い。

午後は友達が働いている高校を訪問する。多少ボラれることを覚悟して車に乗り込むと、運転手が私に話しかけてくる。私と彼の間には共通する言語がないとわかると、今度はスマホの翻訳アプリを利用して話しかけてくる。

—どこから来ましたか?

—日本からです。

運転手は、いやいやそうでしたか、話ができ嬉しいなあ、と言わんばかりに体を動かす。そして翻訳アプリに吹き込む。

—日本人は礼儀正しく、時間に正確です。

—こういわれると、数秒遅れてしまう。でもにっこりして答えることにした。

—どうもありがとうございます。

ここに来た日本人がすべて礼儀正しかったらよかったです、と思う。

まったく他愛ない会話だったが、会話をするうちに運転手は私を気に入ってくれたようで、帰りも迎えに来るから時間を言えという。ぜんぜんボラれなかった。それどころか、おつりがないので多めに払おうとしたら、わざわざ近くの商店まで歩いて行って両替して、おつりを作ってくれた。

この学校には女性の先生たちが多く、女性はみな鮮やかな民族衣装を着ている。これは制服なんだそう。服は長袖と長ズボンだが、体の側面にスリットが入っていて、ほんの少し肌が見える。涼しそう。これほど暑い気候にはピッタリだし、色合いも涼し気なものが多く、彼女たちが動くたびに優雅に揺れる。みんな姿勢がよく、自信がありそうに見える。職員室で少しリラックスして親しげに話している姿は、まるでたくさんの華が咲いているかのようだ。

私が訪れたのはフランス語のクラスと、日本語のクラスだ。日本語クラスでは、高校生たちが私に元気に「こんにちは！」と挨拶してくれる。日本語は中国語や英語などと並んで重要な言語なんだそう。かつてほんのわずかな間、ここに日本軍がいたからではもちろんない。経済発展するこの国にとって、日本はビジネスの重要なパートナーなのだ。もはや漢字を使わないとはいえ、共通する語彙もあるから、親近感があるのだという。みんなよく笑うし、まじめに勉強している。いつか日本に来ることを夢見ているんだろう。すべての日本人がこの子たちに対して、礼儀正しければいいのに。